

(秋田大学教育文化学部こども発達・特別支援講座)

## ▼総合的な学習の時間ならではの「わくわく」

公開当日の授業では、子どもたちがB組の教室からA組とC組の教室に移動したり、タイマーが鳴るとA組・C組間の大移動があったり、その動きにあわせて参観者も大移動。B組の児童がメインながら、A組とC組の児童も共に活動し先生方もサポートする。3年生全体で取り組んできたこの単元の学習ならではの公開授業となり、想像していた以上にわくわくする展開になった。

グループワークでは、ああでもないこうでもない子どもたちが意見を交わす。クラス全体においても、多くの子どもが思い思いに発言している。しかし、秩序が乱れているわけではない。お互いの声を聞き合いながら、自分の思いを発信して伝えようとする。子どもたちは間違いなくこの時間を楽しみにしており、わくわくしていることがうかがえた。

## ▼学習課題、テーマへ迫ることを促す「仕掛け」

研修会の数ヶ月前から本時に至るまで、コロナ禍の中で思うような学習活動が行えないこともあり、先生方は単元設計に苦心されていた。また、総合的な学習の時間は一つの単元が長期間に及ぶため、その単元を通じて子どもたちに獲得させたい概念、能力は何なのかについて、柱を定めることが難しい。しかし長期間に及ぶからこそ、その柱を明確化し、常にそこに立ち戻るようにすることが、授業者、学習者双方にとって重要であることを、昨年度までの実践から学んだ。

本単元の大きなテーマは「自分たちの住む地域がより活性化するために、自分たちにできることを考え、実行すること」であり、それを一つの商店街という場を窓口学習するということである。そのプロセスとして本時が位置付けられ、「お店の人の思いや願いに着目できるか」がポイントの一つとなった。

子どもたちにそうした課題に着目させるための仕掛けとして、A組・C組児童とのグループワークが行われたが、さらに工夫できることはあるように感じた。例えば、ワークシート等を工夫し、元々のランキングをどんな理由でどのように変えたかを、自己認識しやすいようにすること等ができたのではないかと考える。

## ▼子どもたちの学びにおける「行為の中の省察」

本校の全体的な研究テーマである「学びのものさし」づくりから本実践を考える。研究副題にもあるように、学びのものさしは「子どもと教師でつくる」ものであり、教師から一方的に与えるわけではない。では、総合的な学びのものさしを子どもと教師でつくっていくためには、どうすれば良いのか。学びのものさしは、学習の到達度や達成度を判断する規準とされているが、自らの学びのメタ認知を通じて、到達度や達成度のみを見るわけではない。成果だけでなく学習過程に着目することが重要である。ここで「行為の中の省察」という概念を用いて考えてみる。

授業の中でどのように授業を認知し、思考、判断、意思決定しているのか、その過程に焦点を当てた省察（行為の中の省察）を行うことが、教師の専門性を表しているとされる（省察的实践家としての教師）。この「行為の中の省察」を子どもの学習に当てはめると、子どもたちが学習している過程そのものについて省察することが重要、ということになる。子どもたちがどのようにして学んだかという学習の方法面はもちろんのこと、どのようにその問題状況を解決（やりくり）していったか、またその時にどんな感情を持ったか、といったことにも着目する。

総合的な学習の時間においては特に、自らの学びに焦点を当てた「行為の中の省察」が繰り返されることが、学びのものさしづくりにつながると考えられ、またそのような省察を促すような授業設計や教師の働きかけの研究が一層求められると考える。